

『送辛漸』 王昌齡

「一片の氷心」珠玉の一句が心を揺さぶる

「芙蓉楼送辛漸」本来の詩題は上記のとおりであるが「送辛漸」と略した。

辛漸を送る 王昌齡

寒雨連江夜入呉 寒雨江に連なりて夜呉に入る

平明送客楚山孤 平明客を送れば楚山孤なり

洛陽親友如相問 洛陽の親友如し相問わば

一片氷心在玉壺 一片の氷心玉壺に在りと

季節は晩秋。洛陽のあたりへ旅立つ親友辛漸しんぜんを芙蓉楼で送別したときの作である。王昌齡は鎮江の西（今の南京）に勤務していたことがあり、（江寧県の丞しん副知事）そのころの作であろう。

・辛漸……作者の友人であるが伝記は不詳。

・芙蓉楼……今の江蘇省鎮江市の西隅にあって、万歳楼と対

し、北に長江を見下ろす景勝の地にあった楼。

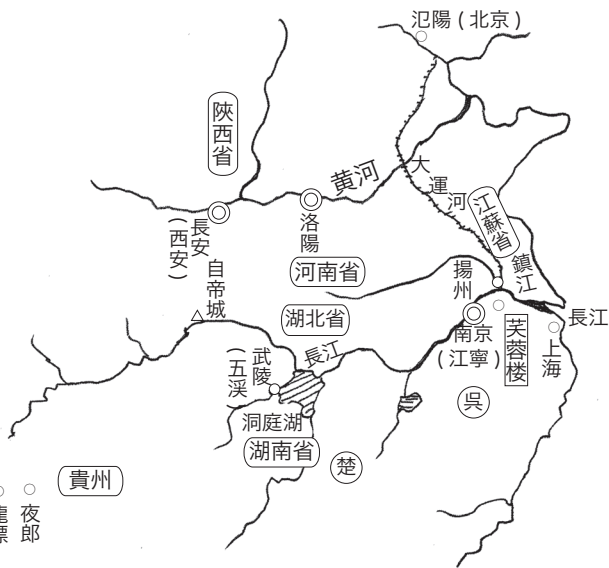
鎮江は長江に臨み、対岸は揚州から大運河が華

北に通じている。

寒雨 江に連なりて 夜 呉に入る

昨夜、君は冷たい雨が長江の川面に降り注いでいるこの

呉の地にやってきた。



【入呉】作者と

辛漸の二人が

長江の上流か

ら呉の地方、

すなわち鎮江

に來たとする

説、川が呉（今

の蘇州）へと

流れ入るとす

る説がある。

呉は春秋時代

の国名で、蘇

州の地名としても、鎮江をも含めた江蘇省の南部の総称としても用いられる。

この起句を口ずさむだけで心象風景が浮かんでくる。

平明 客を送れば 楚山 孤なり

君は、今朝また早く洛陽へと旅立っていくのだが、行く手には楚の山がぼつんと姿を見せている。

さらに確かめるように明け方に客の出発を見送ってしまった。え、あとに残るのは「楚山孤なり」なのである。

江南に左遷されたまま、取り残された詩人の寒寒とした心境を伝えるにはこれだけで十分だ。

【楚山】鎮江から西北の方角に見える山。楚はもと春秋・戦国時代の国名で、今の湖北・湖南両省の異称。また転じて長江中流一帯の地域の称。

この詩は二首連作で、その第二首に「丹陽城南 秋海陰る 丹陽城北楚雲深し」とあるのによって、北方に楚山や楚雲を見ている。丹陽とは鎮江の唐名、隋時代に潤州といい、宋以降は鎮江という。したがってこの楚雲と同じく楚山もまた丹陽城の北方に見える山を漠然と言ったものと解すべきであらう。



長江

洛陽の親友 如し相問わば

もしも洛陽の親友たちが私のことを君に尋ねたら、こう答えてくれたまえ。

詩句はからっと転じて洛陽に飛ぶ。

【洛陽親友】作者が洛陽において手厚い見送りを受けた、綦母潜（六九二〜七四九）李頎（六九〇〜七五一）など

の詩人たちを指すであらう。

一片の氷心 玉壺に在りと

王昌齡は一片の氷が玉の壺の中にあるような清く澄みきった心境である、と答えてくれ。

【一片氷心】六朝の鮑照（參軍）の詩「代白頭吟」の始句に「直きこと朱糸の繩の如く、清きこと玉壺の氷の如し」とあるによっている。左遷されたまま僻地に取り残されていても、自分の心は壺の中の氷と同じだ、と述べている。

最も高雅な玉の壺の中に小さくとも水晶のように堅く輝く一片の氷があるとは、まことに美しいイメージで、それだけで清らかな心の姿をみごとに言い表している。そしてこの絶句は、この結句があることによって永遠のものになった。

鑑賞

起句は別離の情を象徴すべき非情の景であり、承句はそれを受けて別後の孤独を象徴する。また転句の「如し」が効いている。つまり、もう自分のことなど忘れてしまっているかもしれないが、「もしも」私のことを気にかけて問うてくれたら、の意である。転・結の二句は自己の不遇を暗に嘆ずる意で、この詩は送別の詩でありながら、そのことを言わず、自分の伝言を依頼している。そのやりとりの

間に、作者と辛漸の心おきない関係も察せられて、送別詩の一体（一つのスタイル）といえよう。

この詩の眼目は、何ととっても結句の澄み切った心境を述べている名句にあつて、四句二十八字の短詩の中に、別情をあからさまにせず、僻地に残る孤独感とともに塵に汚れた官界から遠のいているからこそ得られる晴れ晴れとした清らかな心情など複雑なものが詠いこめられている。

〈補足①〉「寒雨」は氷雨でもあるし、蕭蕭と降り注ぐ雨でもある。「氷心」は「寒雨」の縁語である。「連江」はそぼ降る雨が、煙るがごとく長江の水に接し、雨と水との区別も分かちがたいという解釈もある。「入呉」と「楚山」の解釈には、当時の範囲の地域を「呉」といい「楚」というていたかは問題である。「楚山孤」の孤独は、孤峰のたたくまいの実景であるばかりでなく、「孤」の字が「寒」と呼応して、印象的で作者の心境をうまくとらえ、後半の二句で完結させている。

〈補足②〉「万葉集」巻六（二〇一八）より。奈良の元興寺の僧が人に侮られたときに詠んでみずから慰めたといわれる旋頭歌に「しら珠は（白い玉の美しさは）人に知らえず（他人にはわからない）知らずともよし知らずとも我し

知られば（私か知っていれば）知らずともよし」というのがある。意味は必ずしも同じではないが、その心意気には通ずるところがあろう。

王昌齡 六九八〜七五五（諸説あり）盛唐の詩人、字は少伯、京兆（陝西省西安）の人、一説には江寧（江蘇省南京）の人ともいう。開元十五年（七二七）の進士（わが国の一種国家公務員試験合格者）。校書郎から汜水（河南省）の尉となる。のち江寧の丞に移った。彼を王江寧ともいうのはそのためである。しかし官界での評判は悪く、龍標（貴州省）

の尉（軍事・警察を司る）に貶せられた。この最後の任地の名をとって、王龍標とも呼ばれる。晩年、安史の乱を避けて故郷に帰ったが、刺史（地方長官）の閻丘晝に殺された。



閻怨（「唐詩六言画譜」より）

王昌齡は不遇に終わった人であるが、詩人としては情緒豊かで清潔な発想が称えられた。特に七言詩に優れ、その多くは歌謡曲としてもてはやされた。また、宮怨の詩（宮女の嘆きを詠んだ詩）は詩仙李白も及ばないといわれる。代表作に「閻怨」がある。

閨 怨 王昌齡

閨中少婦不知愁 閨中の少婦愁いを知らず
春日凝粧上翠樓 春日粧を凝らして翠楼に上る
忽見陌頭楊柳色 忽ち陌頭楊柳の色を見て
悔教夫婿覓封侯 悔ゆらくは夫婿を
封侯を覓めしめしを

* 閨中 女性の部屋 少婦 若い妻

粧 化粧 忽ち すると 陌頭 道ばた

悔 後悔することには 夫婿 夫

封侯 手柄を立てて恩賞を受けること

起句「不知」転句「忽見」結句「悔教」の語は、心理や場面を転換して構成が巧みなものとして知られている。

その他に風物や辺塞詩にも独自の境地を開いた。「出塞」「從軍行」はこの方面の傑作である。李白・高適・孟浩然・王之涣とも交友があり、李白とともに、絶句では唐代随一といわれる。詩集に「王昌齡詩集」五巻がある。

〈参考〉交流のあった李白の詩

聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄

王昌齡が龍標の尉に左遷せらるると
聞き 遙かに此の寄有り 李白

楊花落盡子規啼 楊花落ち尽くして子規啼く

聞道龍標過五溪 聞くならく龍標五溪を過ぐと

我寄愁心與明月 我愁心を寄せて明月に與う

隨風直到夜郎西 風に随つて直ちに到れ夜郎の西

* 聞道 聞いたことには 龍標 貴州にある地名 夜郎の

西に同じ ここでは王昌齡を指す

五溪 武陵にある五つの溪谷 龍標への途上

(意解) 春も暮れて柳の花が散り元気がない子規が啼いている。そのように心がふさがっている時に、君が龍標に左遷され、もう五溪を過ぎる頃と聞いた。

私は、もう君と会うことも語ることもできないかもしれない、このつらく悲しい思いを明月に託したから、月光が風に乗って、君が行くであろう夜郎の西まで運んで行ってくれることを願うものだ。(これがせめてもの君への励ましと思つてほしい)

